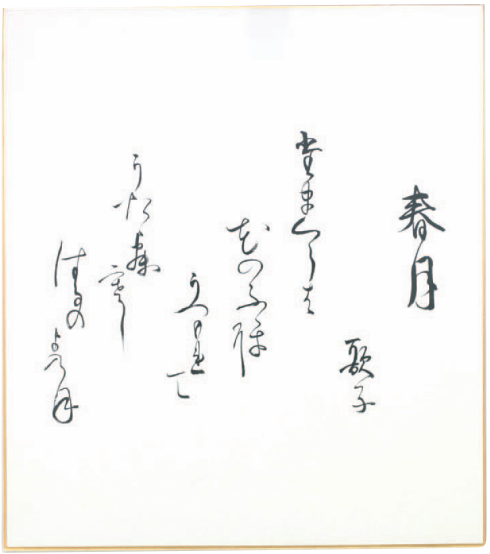

春月　実践女子大学図書館提供

下田歌子絵姿　実践女子大学図書館提供

宮内庁女官登用、歌子に

一八七〇（明治三）年、父錄蔵は幽閉を解かれ、新政府から宣教使史生の辞令を受け、東京麹町に住居を構えた。翌年一七歳となったせきは、老僕を伴い上京して麹町の住居の二階に住んだ。その年の冬、祖母・母・弟が上京し、一家は揃った。ところが、まもなく、父錄蔵は、失職した。せきは、家計を助けるため、近所の瓜屋の上絵を描く仕事に励んだりした。やがて、祖父東条琴台の教えを受ける中で、琴台の知人たちの間に、短歌や漢詩へのせきの才能が話題になるようになった。

一八七二（明治五）年せきは、宮内庁から女官として登用され、皇后に仕える身となった。当時女官は、公卿・諸侯の出身者ばかりで、貧乏学者の娘が選ばれることはなかった。しかし、明治天皇と皇后から、短歌の才を賞賛され、「歌子」の名をもらい、以後、終生歌子を名乗った。当時天皇から「春月」という題で作歌を命じられ、上掲の短歌を詠んだ。

結婚と夫の死、桃夭女塾開設

一八七九(明治一二)年二六歳になった歌子は、宮中を辞し、結婚準備をした。父の推挙で香川の丸亀藩士で、剣士として岩村を訪れ、平尾家に宿泊したことがあった下田猛雄であった。翌一三年結婚したが、歌子は幸せではなかった。猛雄は大酒呑みで、暴力を振るい、やがて病床に臥す身となった。歌子は、夫の看病をしつつ、自宅の隣に桃夭女塾を開いて、家計を支えた。歌子の女子教育の一歩であったが、政府の要人たちの子女が通学し、評判となった。明治一七年夫は死去した。

明治一七年、宮内省御用掛の辞令を受けると、華族女学校の創設を担い、桃夭女塾生六〇名を転学させて開校すると、幹事兼教授となった。一八九三(明治二六)年、宮内省から欧米の女子教育の視察を命じられた。

高等女学校の校舎・校門　実践女子大学図書館提供

婦女家庭訓　実践女子大学図書館提供

椅子にかけた全身肖像　実践女子大学図書館提供

宮内省復職、華族女学校創設に働く

歌子は、各国の教育視察を行ったが、英国の王女たちの教育を視察したかった。しかし、日本人女性の希望はかなわなかった。歌子は、派遣期間の一年延長を宮内省に認めさせると、英語の習得と上流階級との交際を重ね、ついにビクトリア女王と謁見（えっけん）でき、王室の女子教育を視察でき、女子が馬術を修得するなど、日本では考えられたことがなかった健康教育をしていることに接した。

帰国すると、皇女の女子教育掛を命じられた。歌子は、帝国婦人協会を立ち上げ、会長になり、欧米で学んだことを講演してまわった。彼女の主張は、女性も職をもって自立して生き、男女対等の立場で対するべきというものであった。

一八九九（明治三二）年、歌子は実践女学校及び工芸学校を開校した。今日の実践女子大学の前身である。彼女は、それまでの上流家庭の子女に止まらず、一般家庭の子女の教育に力を入れるようになった。

なお、華族女学校は、明治三二年、学習院に併合し、学習院女子学部となった。歌子は、皇太子（のち大正天皇）妃推挙を天皇・皇后から依頼された（実現）ことから、宮中の女官長派のそねみ・反感をかうこととなり、悪い噂を立てられ、乃木希典学長のすすめで辞任し、以後実践学園や各地の女学校の校長を依頼され、勤務した。

愛国婦人会会長を八年

歌子は、一九二〇（大正九）年、愛国婦人会五代目会長となった。この婦人会は、日清戦争で出征した兵士の遺族救済運動に協力することを目的として、明治三四年奥村五百子（いおこ）が主唱し初代会長になった婦人会で、華族界の夫人たちが副会長に名を連ねる会であった。昭和二年辞任するまで、二期八年務めた。その間、各地に夜間女学校を開設し、昼間働く女性が職業技能まで修学できるように図った。

生誕地記念碑（上京時の歌碑）
恵那市岩村町

「生誕地記念碑」除幕に郷里岩村に

一九三五（昭和一〇）年、郷里岩村に「生誕地記念碑」が建立され、その除幕式に招かれ、帰郷して式典に参加するとともに、講演をした。記念碑には、一七歳のとき上京途上で詠んだ短歌が刻まれている。

綾錦（あやにしき）着てかへらずは三国山（土岐市柿野、国境）
またふたたび越えじとぞ思う

一九三六（昭和一一）年四月、『源氏物語講義』を著刊し、九月まで源氏物語講義をしていたが、一〇月八日死去した。八三歳であった。彼女は、よく口にした言葉は、「女性は艶麗（えんれい）であれ」であった。

報道にみる下田歌子

二〇〇〇（平成一二）年二月二一日の岐阜新聞の「下田歌子の功績語る」記事は、出身の岩村町で歌子フォーラムが開催された記事。それらの歌子記事で、最も多いのは、女子教育者としての視点からである。家計を助けるために始めた女子塾であったが、政界の名士の女子が入塾して、歌子の教育方針と教授の内容が評判となり、華族女学校へと発展。それがもとで、学習院創設を招き、その女子部長となり、さらに、皇室の内親王の教育も担うこととなった。

学習院を退く前に、すでに、女子自立のためには、社会で役立つ実践技能をつける必要があるとして、実践女学校をつくったことを讃える記事である。それに次いで、彼女の教育では、源氏物語の読解に力点を置き、女性は「艶」を大切にと説いていたことに注目している。岩村町の城跡の資料館で紹介されている歌子関係史料、歌子の在所平尾邸跡に築造された歌子学問所、故郷を出立するとき土岐郡の三国山（現土岐市柿野）で詠んだ歌の碑などを紹介する記事も見られる。

下田歌子の思想や作品について大学教授らが解説したフォーラム＝恵那郡岩村町、町公民館

実践女子学園創設

下田歌子の功績語る

岩村町でフォーラム

「女子教育を輸入」

恵那郡岩村町出身の女子教育家・下田歌子（一八五四―一九三六）の生き方や思想に触れる「まちづくり講演会とフォーラム」が十九日夜、同町公民館で開かれた。下田の創設した実践女子学園の研究者らが登壇。明治時代にいちはやく大衆女子教育を手掛け、女性の自立を説いた下田の先見性を紹介した。

フォーラムは、いわむらまちづくり実行委員会が主催。今回は同学園が創立百周年記念行事として協力、下田のライフスタイルや作品をテーマに、講演やパネルディスカッション形式で話した。

下田について多くの著書がある実践女子大学図書館長の板垣弘子さんは「下田は一八九三（明治二十六）年から二年間欧米で女子教育を視察して、〝中流以下の大衆女子の教育が国家隆興の基である〟と実感して帰った。この経験がなかったら、上流階級向けの教育だけを行っていたかもしれない」と解説。

また、愛国婦人会の機関誌に寄せたエッセーで、岩村時代の思い出として尊王攘夷（じょうい）派の志士のエピソードなどが多く出てくることから、「自然より人間性を重んじ、信念をもって生きる平尾家（下田の生家）の家風が読み取れる」とした。

須賀恭子同大教授は、下田が幼児教育を重視した点に着目。同じく森岡弘通教授は近代国家形成期という時代背景に触れ、「下田は西欧の女子教育を日本の文化に調和を取った形でうまく輸入した。女性の自立を重視しながら、当時働く場の中心が家庭であったことから、結果的に良妻賢母を説いた」と語った。

2000年（平成12年）2月21日　岐阜新聞掲載